

大阪科学・大学記者クラブ 御中
(同時提供先：文部科学記者会、科学記者会)

2024年1月11日
大阪公立大学

—自閉スペクトラム症児の食支援開始時期の目安に— 食行動質問紙が有望ツールであることを実証

<ポイント>

- ◇自閉スペクトラム症（ASD）の食行動測定のため、2019年に食行動質問紙「ASD-MBQ」を開発。
- ◇256名の子どもの回答結果から本質問紙の妥当性を検討。
- ◇総得点およびカテゴリーごとの得点において、支援開始時期の目安となる基準値を決定。
- ◇幼児期の子どもの食行動における問題の早期発見・早期支援につながる研究。

<概要>

自閉スペクトラム症（ASD）の子どものうち、食行動に問題が見られることが複数の研究者から報告されており、その割合は多いもので約90%にのぼります。そのため、子ども自身のQOL向上や保護者の負担軽減には、早期発見・早期支援の実施が必要です。

大阪公立大学大学院 リハビリテーション学研究科の中岡 和代講師らの研究グループは、2019年に開発した食行動質問紙「ASD-MBQ」の予測妥当性および適切な支援開始時期の目安となる基準値を検討するため、3～6歳の子ども（ASD群128名、非ASD群128名）の保護者に質問紙を送付し、回答を検証しました。ASD群と非ASD群において、平均総得点および質問項目を類似性で分類した「偏食」、「不器用・マナー」、「食への関心・集中」、「口腔機能」「過食」の5つのカテゴリーごとの得点を分析。その結果、両群の間に明らかな差が見られ、本質問紙の有用性が実証されました。また、総得点およびカテゴリーごとの得点において、支援開始時期の目安となる基準値をそれぞれ決定しました。

本研究成果は、2023年12月2日に、Elsevierが刊行する国際学術誌「Research in Autism Spectrum Disorders」にオンライン掲載されました。

「食べる」ことは日々の生活の中で大切な時間です。食行動において、子ども自身や保護者、先生が困りごとを抱えている場合があります。ASD-MBQは診断ツールではありませんが、自閉スペクトラム症児を対象とした調査研究等を通して開発した食行動質問紙です。客観的指標であるASD-MBQを用い、早期に必要な支援を提供することで、皆さまの生活がより豊かになることを心より願っています。



中岡 和代講師

<掲載誌情報>

【発表雑誌】 Research in Autism Spectrum Disorders

【論文名】 Predictive Validity and Cut-off Score of the Mealtime Behavior Questionnaire for Children with Autism Spectrum Disorder

【著者】 Kazuyo Nakaoka, Kiyomi Tateyama, Takuma Yuri, Shun Harada, Shinichi Takabatake

【掲載URL】 <https://doi.org/10.1016/j.rasd.2023.102290>

<研究の背景>

自閉スペクトラム症の子どもでは、偏食など食行動に問題がみられることが国内外で報告されています。自閉スペクトラム症の子どもたちの食行動評価として、2008年にアメリカで開発された「Brief Autism Mealtime Behavior Inventory (BAMBI)」がありますが、低年齢(2~11歳)かつ知的障害や自閉症度の面で重度な子どもが対象でした。

そこで本研究グループでは、年齢を3~18歳とし、知的障害や自閉症度が軽度から重度の子どもを対象とした食行動質問紙「ASD-MBQ (Autism Spectrum Disorder Mealtime Behavior Questionnaire)」を2019年に開発しました。

<研究の内容>

ASD-MBQは3~18歳の子どもを対象としていますが、質問項目の「偏食がある」、「手づかみ食べをする」、「食事に集中できない」などの行動は、幼児期の子どもたちの多くに見られる行動です。そのため、対象年齢のうち幼児期(3~6歳)に着目し、ASD-MBQが自閉スペクトラム症と定型発達児(非自閉スペクトラム症児)を判別できるかを検証しました。また、総得点だけでなく、質問項目を類似性によって分類した「偏食」、「不器用・マナー」、「食への関心・集中」、「口腔機能」「過食」の5つのカテゴリにおいて、支援を開始する目安となる基準値を検討しました。

まず、調査対象である3~6歳の子ども256名をASD群と非ASD群の2群に分け、ASD-MBQ得点についてMann-Whitney U検定を用いて2群比較しました。その結果、平均総得点およびカテゴリごとの得点においてASD群、非ASD群の間でそれぞれ有意差が見られ、ASD-MBQの有用性が実証されました。

次に、ROC分析(Receiver Operating Characteristic Analysis)を用いた分析により、総得点およびカテゴリごとに基準値を検討しました。その結果、5点中総得点では2.04点、「偏食」では1.59点、「不器用・マナー」では1.86点、「食への関心・集中」では2.06点、「口腔機能」では1.63点、「過食」では1.90点を基準値として決定しました(図1)。

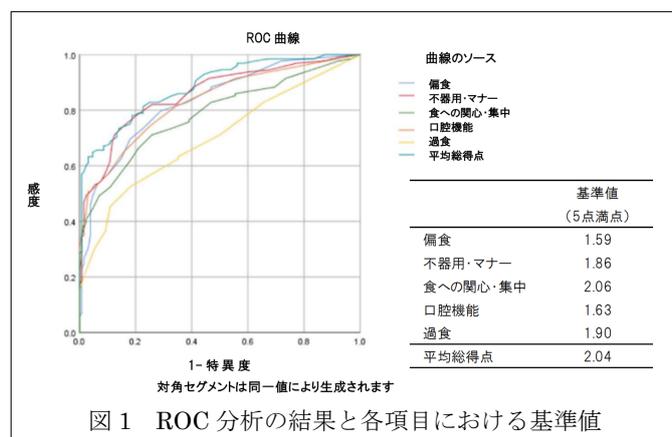


図1 ROC分析の結果と各項目における基準値

<期待される効果・今後の展開>

多くの保護者が幼児期の子どもの食行動について悩みを抱えていることが報告されており、専門家への相談のタイミングの目安となる基準値がわかると、早期発見・早期支援につながるだけでなく、子どもたちや保護者、学校の先生の生活にも良い面で影響があると考えています。現在は、専門家がどのような支援を提供すれば良いか、その方法や有効性についても研究を行っています。

<資金情報>

本研究は、JSPS 科研費 (JP16K04839、JP19K02917) の支援を受けて実施しました。

【研究内容に関する問い合わせ先】

大阪公立大学大学院 リハビリテーション学研究所
講師 中岡 和代 (なかおか かずよ)
TEL : 072-950-2111
E-mail : nakaoka@omu.ac.jp

【報道に関する問い合わせ先】

大阪公立大学 広報課
担当 : 竹内
TEL : 06-6605-3411
E-mail : koho-list@ml.omu.ac.jp